

146. 昭和61年度滋賀県下における発掘調査の紹介

その4

43. 古墳時代の祭祀遺物が出土

守山市赤野井 赤野井湾遺跡

赤野井湾遺跡の天神川水門地区は、守山市赤野井地先の赤野井湾の湖岸地区に位置する湖底遺跡である。赤野井湾は野洲川の形成した沖積平野を流れる法竜川、天神川、守山川、境川などの大小の河川が注ぎ込み、湖岸には葭や葦が群生する低湿地帯を形成している。



人型土製品、ミニチュア土器等

調査区は天神川河口で、85年度調査した水門地区から、新赤野井港までの湖岸堤地域である。調査では二時期の遺構面が標高82.70mから82.40mにかけて検出され、多量の木製品や土器などの遺物が出土した。下層遺構は弥生時代後期の流路が検出され、石庖丁形木製品や赤色に彩色された有孔板（木桶の一部）などが出土した。上層遺構では古墳時代の流路のほか、足跡群、魃跡などが検出された。流路からは5世紀前半と6世紀後半を中心とした土器群が出土した。木製品では舟形、広楯、鋤、えぶりや椀、槽など多数出土した。石製品では瑠石製紡錘車、管玉、有孔円板などがあり、土製品では手捏土器、製塩土器片、土製人形などが出土した。古墳時代の土製人形は安土町小中遺跡で出土しているが、全国的にも祭祀遺跡からの出土が多い。本遺跡では流路の肩付近から、集中して出土しているため、何らかの祭祀が川岸で行われたものと思われる。

琵琶湖の水面下数mから、多数の遺物や遺構が検出されることは、琵琶湖の成立を考える上で重要である。

(財)滋賀県文化財保護協会 演 修

44. アカホヤ火山灰層下で遺構

守山市赤野井 赤野井湾遺跡（浚渫A）

本調査は、琵琶湖総合開発事業の一環である赤野井湾浚渫に伴う試掘調査である。

調査は、湖中に内側50m×50mの二重の鋼矢板を打ち込み、排水後これを行った。

調査の結果、上層一弥生～奈良・平安時代と、下層一縄文時代早期末葉の二時期の遺構面、縄文時代中期および早期末葉の2枚の遺物包含層を検出した。上層遺構は、ほぼヘドロの直下から検出され、円形でなだらかな落ち込み状遺構である。落ち込み埋土の下層から弥生時代前期～中期にかけての土器片が、上層からは奈良・平安時代のものと思われる木製品が出土している。縄文時代中期の遺物包含層は、標高81.6～81.7mに存在し、船元式土器の深鉢胴部破片の出土をみた。縄文時代早期末葉の遺物包含層は、標高80.8～81.0m付近に位置する。土層中からは多量の土器・石器類とともに、玦状耳飾りが出土している。また、本包含層の直上には、アカホヤ火山灰層の堆積が確認されている。有文土器には早期後葉に位置付けられる粕畑式土器から、早期末葉の天神山式土器までが認められる。量的には粕畑式・上ノ山式・入海I式と徐々に増え、入海II式の段階で急増する。玦状耳飾りは外径約4cmを測り、断面はD字形のものである。材質は滑石で色調は褐色を呈する。縄文時代早期末葉の遺構面は、標高80.8m付近、湖底下約1.5m、湖面からは約3.5m下に存在する。遺構としては、約30基の土坑群が検出された。土坑のなかには、焼石の集積が認められるものが3基存在する。焼石群の下には多量の炭化物の堆積がみられることから、集石炉として使用されたものである可能性が考えられる。湖中においての生活遺構存在の確認は、湖底



集石土坑検出状況

遺跡形成を考える上において大変重要な意味をもつと言えよう。

(湖沼賀県文化財保護協会 平井 美典)

45. 縄文時代晩期～弥生時代中期の遺物多量に出土

守山市山賀 小津浜遺跡

新守山川改修工事に伴う発掘調査のうち、湖岸から300m～500mの部分にあたり、山賀遺跡の西側に存在する遺跡である。

従来は弥生時代前期～中期の旧河道の存在のみが確認されていたが、上層で中世の遺物を多量に包含する河道跡が検出された。河道は大きく蛇行しており、川幅は30m前後であったと想定される。川岸の平坦部等に遺構は検出されなかったが、川岸の肩部と中洲沿の2か所に約20mにわたり杭列が存在している。杭列は径約10cmの丸木杭と径約4cmの竹杭で構成されている。河道に伴う護岸施設の1部であろう。

遺物としては、土師器皿類・黒色土器を主体とし、須恵器、土錘等の土器類が多量に出土している。また木椀や木製の柄が残存している刀子、錐等の木製品・鉄製品も残りが良い。黒色土器碗の底部外面に「二」の墨書を持つものが見られる。

中世の河道に削り残された部分および河道底部からは、縄文時代晩期～弥生時代中期の遺構が検出された。上層の旧河道とほぼ重複する旧河道からは、主にスクモ層中から弥生時代前期・中期の土器・石器・木製品が多量に出土した。部分的にスクモ層下に暗黒褐色粘質土が堆積しており、縄文時代晩期の土器が出土する。削り残された高まり上には、溝・ピット等が存在する。弥生時代中期の方形周溝墓も検出されており、周囲に遺構が拡がると想定される。

縄文時代晩期の突帯文を持つ土器も一様ではなく、時期幅が存在する様である。弥生時代前期のものは、古い様相を呈する口頸部に段を有するものから、貼付突帯文や多条のヘラ描沈線文を持つものまで極めて多様である。木製品は、鍬・鋤・田下駄棒等の農耕具、斧柄・弓等の工・狩猟具、高環等の容器類の他に板状・棒状品が多量に出土している。石器としては、磨製の各種石斧類、石包丁や砥石、剥片が見られる。土器以外にも多様な遺物が多量に出土していることから、より多面的に当時の生活を窺い知ることができよう。

(湖沼賀県文化財保護協会 小竹森 直子)

46. 古墳時代・中世の集落跡

守山市山賀 山賀遺跡

昭和61年度の新守山川改修工事に伴う発掘調査は、湖岸から300m～800mの部分にあたり、その東半の



第1面遺構完掘状況

山賀町集落北側において古墳時代と中世の集落跡が検出されたので、その概要を記す。

古墳時代の遺構面は湖岸から約600mの付近にのみ認められ、平面形が方形を呈する竪穴住居跡が数棟検出された。埋土からは受口状口縁袋形土器・高環・器台等が出土している。また、竪穴式住居を切って7世紀代の遺構が存在するが、稀少である。

中世の遺構面は湖岸から約700mの付近では、耕土・床土直下より3面存在する。上層である第1面では、2間×3間の掘立柱建物1棟、2間以上×3間の掘立柱建物1棟、2間×2間の総柱建物(倉庫)1棟が検出された。2間×3間の掘立柱建物の柱穴は円形であるが、他の1棟は限丸方形である。共に礎盤の残存するものがある。建物の下流側(西側)に約20cm高くなった1辺20m程度の土壇状を呈する部分があるが、その上面に遺構は認められない。この東斜面から和鏡が1面出土している。

第2面では、多数のピットと土壇群が検出された。土壇には、楕円形・隅丸長方形・明瞭な角を持つ長方形のものがある。隅丸長方形のものには、木棺が残存するもの、あるいはその痕跡を確認し得るものがあり土壇墓となる。楕円形のものには深さ10cm程度しか残っていないが、上面から信楽のすり鉢・甕の破片がかなりまとまって出土しており、蔵骨器を伴う土壇の可能性もある。多数のピットは2間×3間程度～4間×6間程度の掘立柱建物を構成するもので、これらの建物群と土壇墓群との関連に興味を持たれる。

第3面は、第1面の土壇状部分を中心に遺構が存在している。L字状の雨落ち溝を伴う3間×4間の総柱の掘立柱建物1棟、2間×3間程度の掘立柱建物が3棟程度から成る。

出土遺物としては、日常雑器である土師器皿類、黒色土器碗を主体として、信楽・常滑の摺鉢・甕、土師質・瓦質の羽釜・鍋・三足羽釜・炮烙等の調理具、輸入陶磁器である青磁・白磁碗・合子蓋、土錘、砥石、

鉄鎌等多種多様である。概ね鎌倉時代後半～室町時代前半の遺物であり、第1面が室町時代前半に相当する。

山賀遺跡の主たる部分は、旧河道を挟んで上流側に隣接する杉江遺跡とほぼ同時期の集落跡であり、今後両者の遺構・遺物の比較検討が望まれる。

(勸滋賀県文化財保護協会 小竹森 直子)

47. 竪穴住居跡を一部検出

守山市山賀 杉江遺跡

杉江遺跡は、守山市山賀町に所在する。

今年度は、河川改修、県営かんがい排水工事、県営ほ場整備に伴う調査がおこなわれた。

県営かんがい排水工事に伴う調査

県道大津・近江八幡線(通称浜街道)の山賀交差点の100m南西(琵琶湖)寄りの地点から、北西方向(改修新守山川)に向かって、長さ140m、幅1mのトレンチを設定した。

トレンチの北西端部分(北西端から南西方向に約30m)は、山賀川の河川敷とおもわれる河原石と砂の堆積層が、耕作土の床土下に存在する。

トレンチの中央部から南西部にかけては、地表面マイナス30～40cmに遺構面を検出した。トレンチ中央部、南西部においては、近世の竹製の排水路(通称シメキ)の跡を検出した。



検出された掘方跡

北西端から30m付近から、南西方向へ100m付近までにかけては、硬くしまった砂礫土によるしっかりした遺構面があり、竪穴住居跡2棟、掘立柱建物の柱痕2箇所、近世溝跡が検出された。

竪穴住居跡(2棟)は方型プランを有するものと思われ、近接して所在する。北側に所在する棟には屋外に煙道が伸びている。

掘立柱建物の柱痕は、柱穴の直径は20cmで、掘方は一辺40cmの方型を呈するもので、煙道を有する竪穴住居の廃棄埋没後に、その埋土に穿たれている。

県営ほ場整備に伴う調査

かんがい排水のトレンチの中央部に直交する形で南東に50m、北西95m、幅1mのトレンチを設定した。各トレンチでは、地表下30～40cmに遺構面を検出し、近世の排水溝(シメキ)の跡と、畔跡を検出している。

(勸滋賀県文化財保護協会 稲垣 正宏)

48. 掘立柱建物1棟を検出

守山市欲賀 杉江東遺跡

杉江東遺跡は、守山市欲賀町に所在する。調査対象地区は、県道大津・近江八幡線(通称浜街道)の山賀交差点の東側に隣接しており、切土工事に伴う約1,000㎡水路工事に伴う約400㎡に分かれる。

切土工事に伴う調査区は、周囲の水田面より20cm～60cmの高まりを持つ鍵手状の微高地で、現況は畑地となっている。

調査区南西隅から3間×6間の掘立柱で構成される建物跡が検出された。柱痕からは、土師質皿が出土しているが、小片のため年代等は判然としない。

微高地の盛土そのものからも土師質皿の小片が多数出土しているが、小片のうえ磨耗が著しく年代等は判然としない。

水路敷に伴う2本のトレンチは、微高地の南西方向へ115mと215mにある北西方向に伸びるトレンチで、西トレンチが幅3m、長さ96m、東トレンチが幅1m、長さ94mである。現地地表下30cm～40cmで遺構面を検出した。

遺構面では、溝跡を8本検出している。西トレンチ南



第3トレンチ(南より)

東隅では、現地地表下20cm～30cmの地点で南東端から北東へ向って5mほど土器包含層が検出されており、宝珠つまみを有する須恵器杯蓋、それに伴う杯身等が出土している。

(勸滋賀県文化財保護協会 稲垣 正宏)

49. 礎石立建物と地鎮具検出

守山市石田 石田三宅遺跡

滋賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う事前調査として4月から9月まで10,000㎡を対象に調査した。弥生時代中期の溝、古墳時代初頭の旧河道、平安時代後半期の建物跡が検出された。

旧河道からは、庄内式～布留式の土器が、破片ではあるが非常に残りの良い状態で多量に出土した。小型器台、高杯が多いのが注目される。他に木製品も少量ながら出土した。

平安時代の建物は10棟前後検出されている。中でもSB-2は4×3間の礎石立の建物である。この建物の柱穴の1つから地鎮めに用いたと思われる壺・皿が検出された。ピットの底に須恵器の短頸壺1点を置き、その上に土師皿を10枚納めてあった。また同じ建物の中のピットの1つにも同様に、ピットの底に須恵質短頸壺を入れ、その上に土師皿を7枚納めてあった。10世紀末ぐらいのものと考えられる。

他に2m×3mの土坑の中に直径1mの丸い島が残る、ほころと思われる遺構を検出した。土坑の中には黒色土器碗が投棄されていた。この遺構に隣接して、一辺3.2m、幅約60cmの溝が四方にめぐり、溝中にはこぶし大の礫が散乱していた。遺構の性格は不明である。

この石田三宅遺跡は小字を「堂の内」と言い、隣接して「見福寺」という字名が残ることから当初は、寺院関係の遺構が予想されたが、瓦は布目瓦が一点出土したのみで、他に寺院関係のものは出土しなかった。しかし、礎石立ちの建物や地鎮の跡、ほころ遺構などが検出され、寺院等が近隣にあった可能性がある。

(勸励賀県文化財保護協会 森 格也)

50. 方形周溝墓群



m²を発掘調

方形周溝墓分布図

査した。県立成人病センターを中心とする吉身西遺跡では、これまでに弥生時代後期、古墳時代前・後期・奈良～平安時代の各種遺構が広範に分布していることが知られていたが、同センターの東側は空白地であった。

今回の調査で、この空白地に弥生時代～平安時代の遺構の存在が知られ、中でも調査範囲の南端で合計27基に達する方形周溝墓が検出され、大規模な墓域を把握した。

方形周溝墓は弥生時代中期後葉に属し、台状部の規模が一辺7m～11m前後の大きさで、同溝は深いU字状を呈す。平面プランでは周溝を四辺に巡らせるもの、

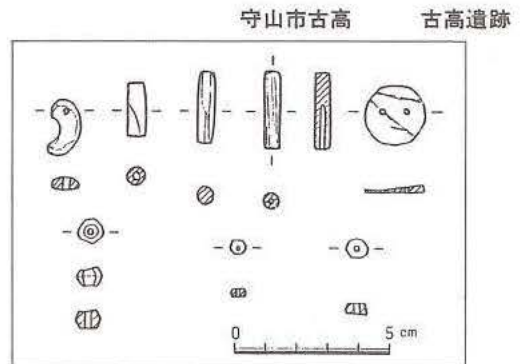
四辺が独立するもの、コーナーが浅くなるものなど差異をもっている他、周溝が連結せず、独立するものがあることも注目される。遺物は周溝内に比較的良好な状態で供献土器がみられ、壺、高杯、水差、甕の器種がある中で、壺、水差しが多く出土している。

墓域は南北方向に細長い帯状の部分に形成され、延長約250m、幅30mである。分布状態を観察すると、墓域の中央に南北方向に細長くのびる残地があり、これにより、南群と北群の大きく二群に分かれ、それぞれの群が更に4～6基で小群を形成していると考えられ、各小群の南・北端に周溝を連結しないで単独の周溝墓が存在しており、遺物では前後関係が明らかでないが、群構成の重要な位置を占めていると思われる。

なお、この方形周溝墓群に対応する集落については推測の域を出ないが、吉身西遺跡(守山市宇上横枕地点一乙貞22号掲載)が有力である。

(守山市教育委員会 山崎 秀二)

51. 滑石多量に出土



滑石製遺物の各種

古高遺跡は市立南中学校を中心に広がる縄文時代から鎌倉時代にかけての集落跡である。今回の調査はこの南中学校の隣接地において、市道古高一川田線の道路改良工事に先立つもので、約3,000m²の調査範囲に8ヵ所の調査区を設定し、北から順次調査を行なった。

検出した遺構は溝、ピット、土壇などであるが、このうち北端に位置する調査区ではこの調査区を横断する幅1mと2.5mの2条の溝があり、溝内より多量の滑石が出土した。前者の溝ではチップのみであったが、後者の溝からは白玉をはじめ勾玉、管玉、棗玉、双孔円板などの製品約200点とこれらの未製品、チップが出土し、玉つくりに関連する溝と思われる。共伴する遺物から古墳時代前期と考えられ、この時期の遺構としては昭和58年の調査で東方約50mのところ方形周溝墓を検出しており、この周辺に玉つくり工房が存在すると思われる。

(守山市教育委員会 畑本 政美)